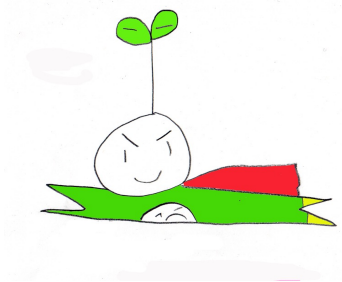
□ベネッセこども基金Meet Up　2024#1
□当事者・学校・行政と考える　病気や障がいを抱える子どもたちの
□「体験格差」をなくすために何ができるか～授業・学び事例とこれから～

公立小学校での取り組み
～アバターロボットでかなえた学校参加～

自分研究 ✖ アバターロボットの実践事例

公立小学校　特別支援学級担任　学校心理士
森村 美和子

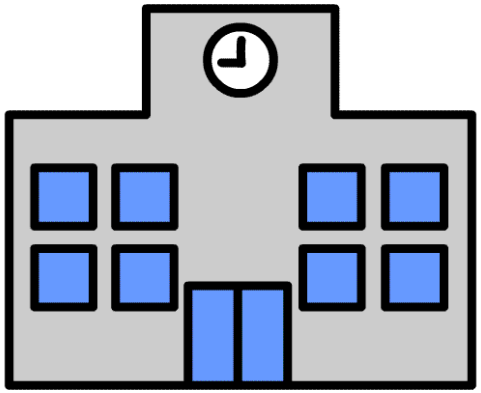


公立の小学校

通常の学級

8.8%

通級



特別支援学級

3.4%

知的に遅れはないものの学習面又は行動面で著しい困難を示す通常学級に在籍する児童生徒の割合

（文部科学省調査　令和４年）

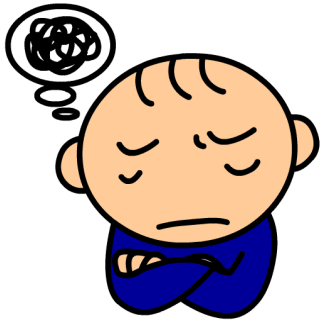
特別支援学級在籍

1.6%→3.4%

１０年で約２倍

不登校　約３０万人

困難さ



生きづらさ

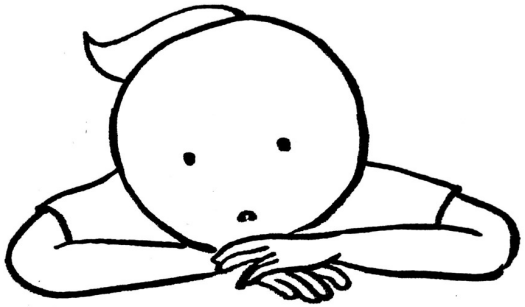
体験格差

学校は
多様な子どもたちが
いることが
前提となっているか

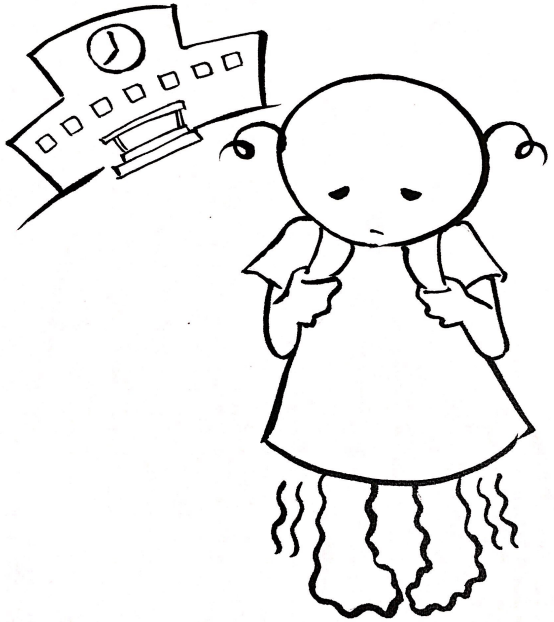
もやもやと葛藤とともに‥

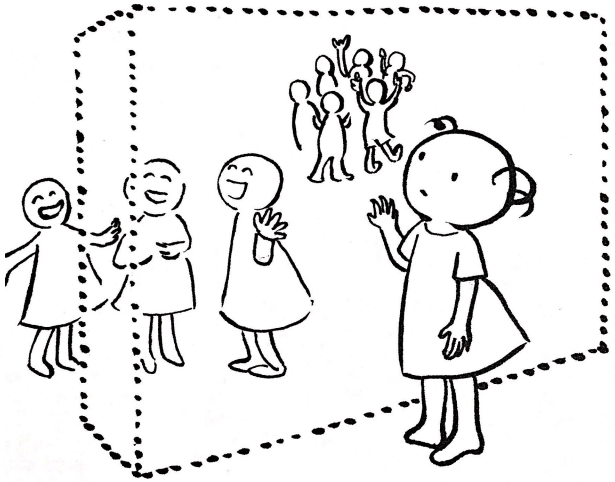
ぼくって変なのかな？

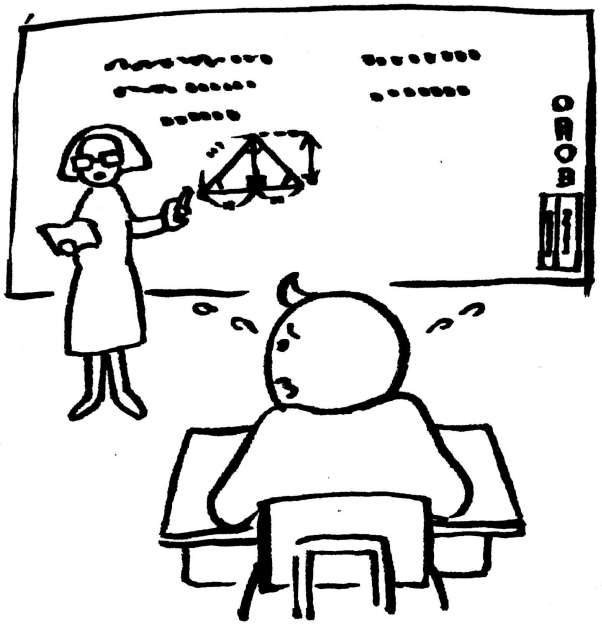
みんなと違うよね？



おかしいのかな？





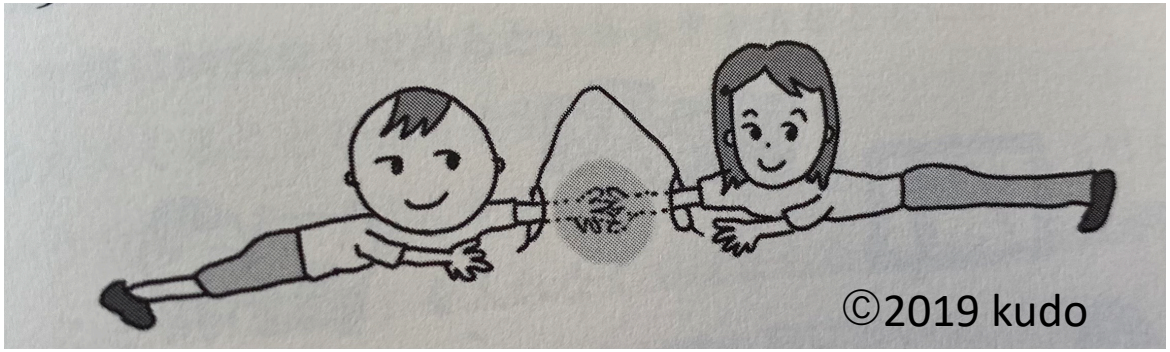


当事者研究とは

　自身の困りごとや生きづらさについて研究者となり、周囲の仲間たちと語り合うなかで困りごとへの理解を深めることや、よりよい付き合い方を探していく営みのこと

東京大学先端科学技術研究センター准教授
小児科医　車椅子ユーザー　熊谷　晋一郎先生

コミュニケーションとは
人と人の間にあるもの



どちらか一方の責任にされることに違和感を感じる

（２００８、熊谷、綾屋）

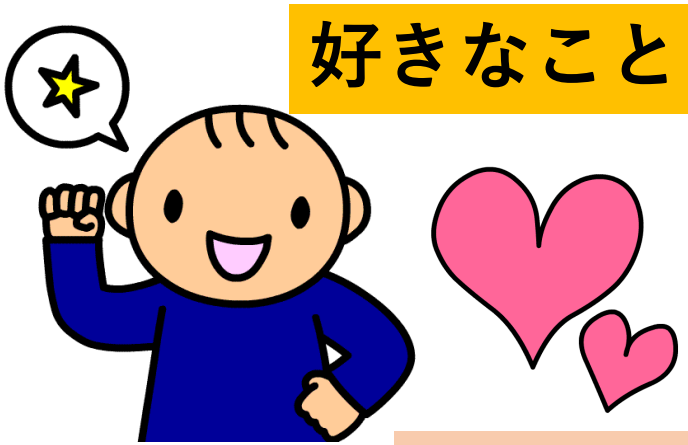
東京大学先端科学技術研究センター
特任講師　ASD当事者　綾屋 紗月

自分研究

♡安心して困ることができる♡困っていることは悪くない♡ヘルプを出せるように

♡自分と困りごとを切り離す　♡自分を責めない　♡楽しく対処方法を考える

同じ悩みや課題をもつ仲間と困っていること等研究し、対処方法を考えたり　実験(実践)したり発表　したりする試み



研究員：子供たち

対話・共同研究

共同研究者：先生

参照「特別な支援が必要な子たちの自分研究のススメ」金子書房、熊谷晋一郎監修

子どもたちの

見ている景色から

スタートする

子どもの声を聴く

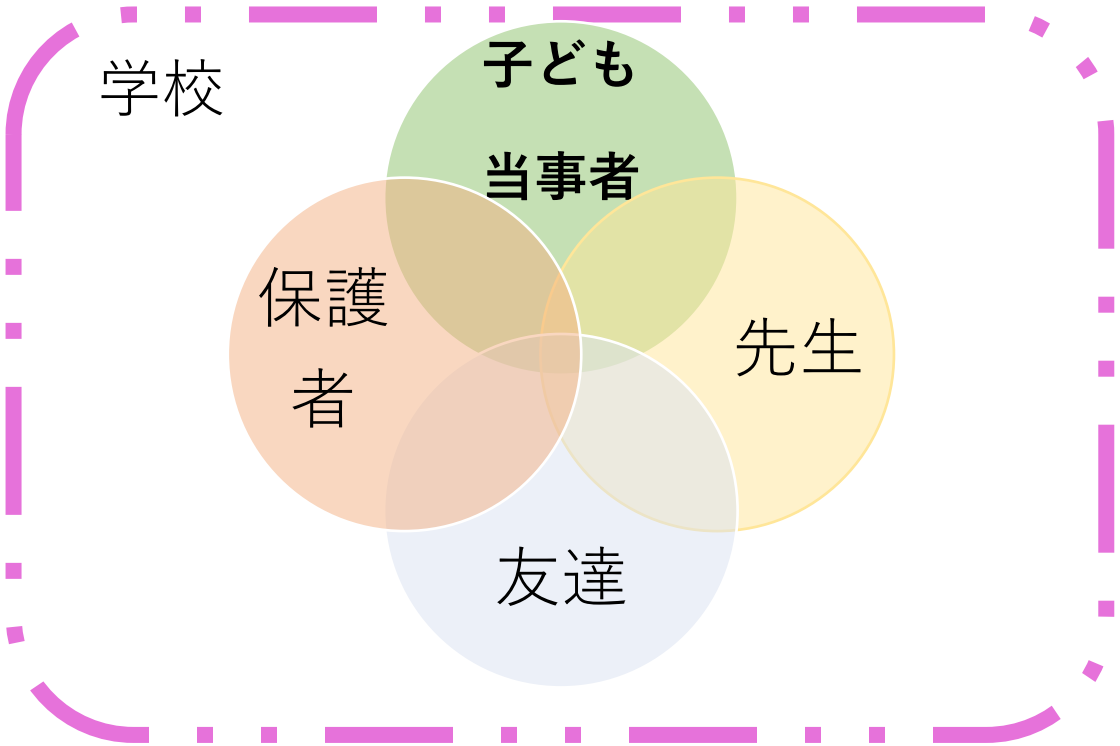
大人側の
子ども　イメージ
を再構築してみる

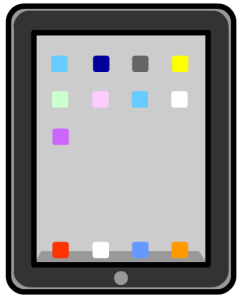
環境側が変わること

アバターロボットの実践事例

自分研究 ✖ アバターロボット

「アバターロボットを使ったコミュニケーション
～学校でどんなことができるかな？やってみたいを叶えよう～」





ipad

KUBI
導入のポイント

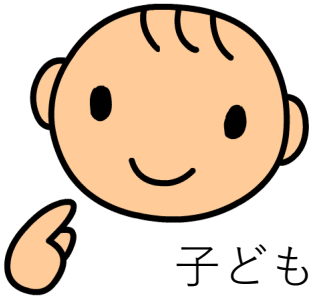
Telepotalk（テレポトーク）

○一人一台配布のGIGA端末を活用できる。
○アプリをダウンロードで活用できる。
○学校のWi-Fiを活用できる。
○子供たちが日常の活用している道具である。

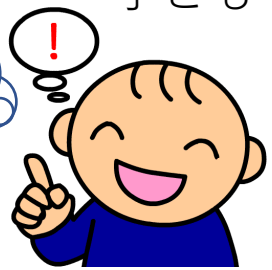
♡画面を動かして自分の見たい景色を見ることができる。
♡アバターの表情を変えられる。
♡アバター、顔出しの切り替えが可能。

アバターロボット使ってみる？

やってみたい！



なじみあるゲーム
の世界みたい。
楽しそう！



社会とつながる方法があるならなんでも試したい。
習い事も外出も難しく、経験するチャンスがない。
就労なども含めて、将来の可能性につながるかも。

アバターでやってみたいこと
なあに？

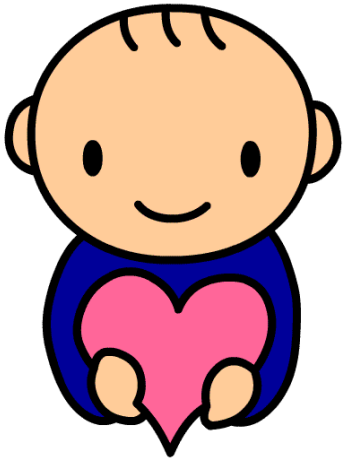
アバターでやってみたいこと

カラオケ
大会

カードゲーム

みんなで
お絵描き

みんなで
ダンス



かくれんぼ

プログラミング

おにごっこ

カードゲーム

みんなと過ごす

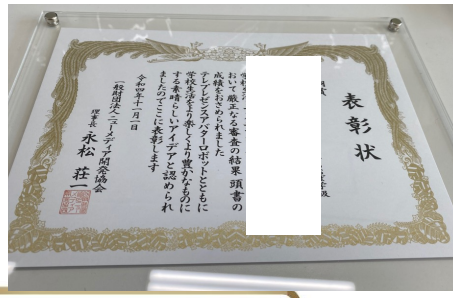
おしゃべり

行事に参加

一般財団法人ニューメディア開発協会主催

　これまで当たり前のように学校に通い、当たり前のようにそこで授業を受け、行事をしてきました。その「当たり前」をテレロボを用いて根底から覆す、**アイデア**を募集し審査するコンテストです！

一般財団法人ニューメディア開発協会ホームページより



銅賞

おしゃれロボット

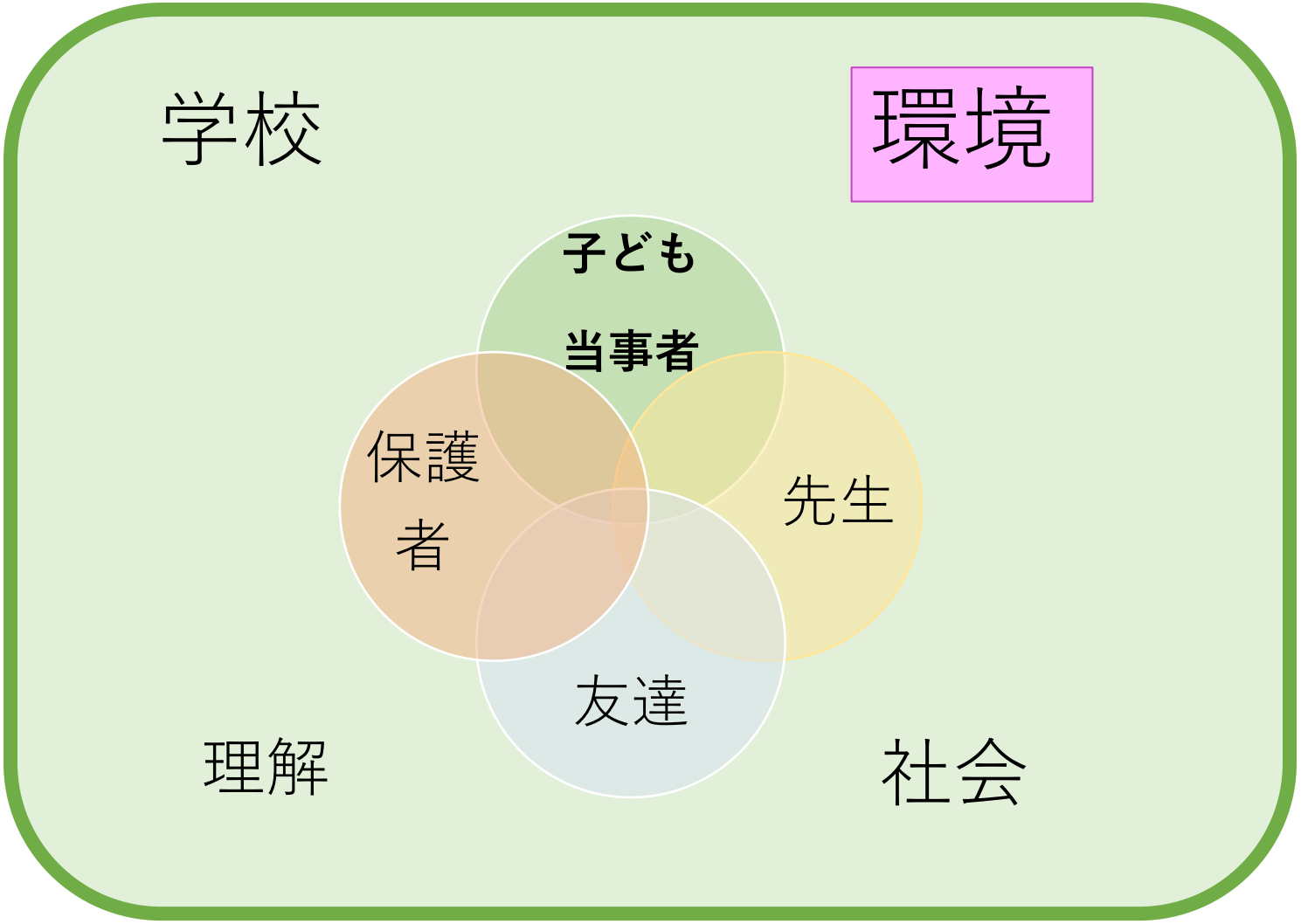
Aさん

わたしの分身ロボットなら、ロボットもわたしらしくカスタマイズしたいな。大好きな色の服とか髪飾りとかおしゃれにしたい。一緒に学校生活を送るなら、見た目から可愛くしなきゃ。その日の気分で、服も変えて。わたしらしいロボットにしたい。だってわたしの分身だから(^^)

本人の感想

顔を出さずに感情を表現できるので恥ずかしくない。相手の目を見るのが怖いので見なくても失礼じゃないところが気楽。自分でカメラを動かせるのがいい。自分だけど、自分じゃないので、人が沢山いても怖くない。ざわざわしているところが苦手だけど、クビーなら音量を変えられるから平気。

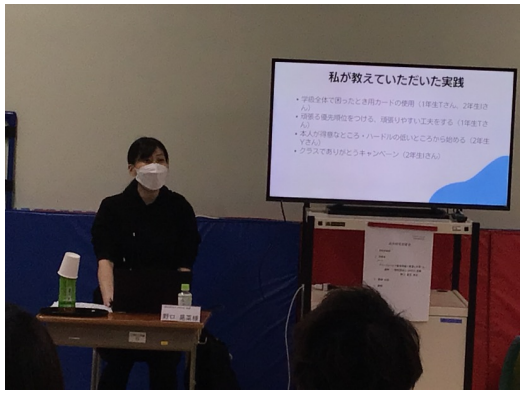
アバターロボット導入を支えるもの



校内研修会　インクルーシブな教育

多様な子どもが過ごしやすい学校づくりをめざして

校内研修で理解を広げる



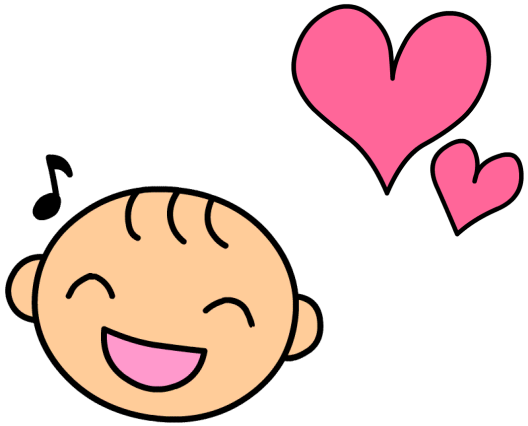
一般社団法人UNIVA理事　野口晃菜

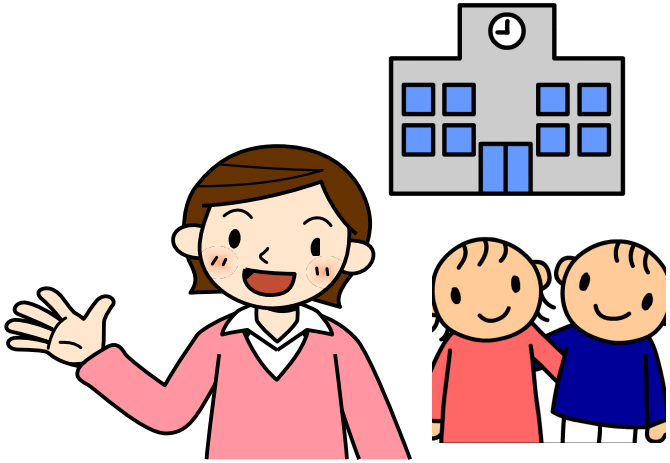
実践してみて

・子供のニーズからスタートする。
　アバターありきではない
・子供の声を聞くこと　当事者の声
・つないだ先が魅力的か。つながった
　先が安心安全か。つながりたいのか。
・社会側のありようを考えていくこと。

新たな価値観
大人側の捉え直しの必要性

コミュニケーションとは
人と人の間にあるもの





アバターがつなぐコミュニケーション

アバターで、できなかったことができると
自分はダメじゃないと思える
やってみようの希望が生まれる

アバターは子どもの可能性を広げる道具になりうる

ありがとうございました

自分研究について

８月末刊行

※書影は仮。変更の可能性あり

☆アバターの実践についても載っています。